

Wie Eckhart über das Übel verstanden hat. —Das Nichts als Ursache des Übels und Schöpfung—

Tatsuya Yamazaki

Das seit Kirchenväter tradierte Verständnis, dass das Übel *privatio esse* sei, begreift Eckhart als *negatio effectus*, der die in der Außenwelt geschaffenen Seienden darstellt. Der daraus abgeleitete Satz „das Übel sei das Nichts“ (*malum est nihil*) ist aus der Schöpfungstheorie Eckharts zu verstehen. Dieses Nichts ist also mit dem Nichts identifiziert, aus dem Gott die Welt geschaffen hat.

Die Frage nach dem Übel gehört einerseits zur Metaphysik, insofern das als *privatio esse* verstanden ist. Das Übel gibt andererseits Anlaß zur Erlösung des Menschen, insofern der Grund der Geschaffenen in der Schöpfung Gottes besteht. Der Grund ist damit als die ethische Bestimmung der menschlichen Handlung zu verstehen.

エックハルトは悪をどのように考えたか

—悪の原因としての無と創造—

山 崎 達 也

はじめに

悪とはそもそも何であるのか。この問いをキリスト教全体を通じて考察するさいに前提とすべきことは、「創世記」第1章31節、すなわち「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」という聖句の義解である。この聖書神学的観点からいえば、神の創造によって生じた宇宙全体に存在するものはすべて善きものであり、したがって悪は存在しないということが帰結される。ここから神学は、悪を「存在の欠如」(privatio esse)あるいは「善の欠如」(privatio boni)として理解する。

周知のように、中世哲学を通じて、悪の問題にその生涯をかけて取り組んだのはアウグスティヌスであり、その功績を継承し、独自の展開をしたのがトマス・アクィナスである。この流れのなかでエックハルトもまたその独特の思考によって悪の問題を取り扱っている。エックハルトは「悪について」(De malo)という論考¹⁾を自ら書いているほどに、悪の問題に強い関心を抱いていた。したがって、現存している著作全体を通じて悪の問題に頻繁に言及しているが、その大部分は創造との関連において語られている。本論では、悪についてのエックハルト独特の解釈を検討し、そのことによって創造をいかに解しているか、という問題にアプローチしたいと考えている。

1. 悪の原因としての無

エックハルトは旧約統編「知恵の書」第1章13節「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない」に対する註解において、悪を罪と罰とに区分し、どちらが神に由来するのか、さらにはどちらがより大きい悪であるのか、といったそれまで頻繁に議論されてきた道德神学的観点からの問題設定を回避し、悪を存在からの欠如 (privatio) ないし落下 (causu)、存在の欠如 (defectus)、不在 (absentia) ないし欠落 (carentia) として理解する、いわば存在論的観点から悪の問題にアプローチしようとしている。ここから、悪を「存在の欠如」とみなす教父以来の伝統的解釈をエックハルトが継承していることは明らかにはなるが、概念 defectus に潜んでいる意味をエックハルトは探り出しより鮮明にすることで、悪を「結果の否定」(negatio effectus) と捉える。「結果」とはエックハルトによれば、外部世界において造られた、ないしは造る者の外部に造られた何らかの存在者を意味する²⁾。つまり、悪はいかなる意味においても造られたものすなわち創造されたものではないとひとまず結論される。

悪が存在の欠如であるかぎり、神が悪の原因であることは以上のことから不可能である。なぜなら、存在そのものの固有にして直接的な原因が神にほかならないからである。したがって、アウグスティヌスの『自由意志論』(De libero arbitrio) において、罰という悪の作者が神であるという解釈は承認されるにしても、神自身がその悪の原因であるとの見解はいかなる意味においても拒否されなくてはならない。また、存在は善と置換可能である点からいえば、存在が悪であるとはいえない。さらにはトマスが『神学大全』(Summa Theologiae) 第1部第48問題第3項主文において述べているように、悪は善をその基体として存在している付帯的なるものであるから、われわれが悪を認識する仕方は悪を「善の欠如」(privatio boni) としてフォーミュラ化するしかないことになる。善と悪とのこうした関係についてエックハルトはアウグスティヌスに倣って、「悪はつねに善のうちにある」と解し、さらに「ヨハネによる福音書」第1章5節すなわち「光は闇のなかで輝いている」の義解において、「善の形象において以外は、

見られることも、認識されることも、輝くこともない」と説明している³⁾。

さて、結果は原因との相対的關係において名づけられるのであるから、悪が結果でないのであれば、悪は原因を有してはいない。したがって、悪の原因を探求することは、原因を持っていないものの原因を探求することを意味する。別の表現を用いれば、無の原因を尋ねることは何も尋ねないことを意味する⁴⁾。しかしながら、このように語りながらもエックハルトは、いわば無の積極的側面を主張しつつ、悪は無である (*malum autem est nihil*) と断言する。さらに命題「悪は原因を有していない」は「悪は原因として無を有している」と肯定命題へと転換され、無そのものがすべての悪の原因であると述べられる。つまり、感覚のそれであれ、損害であれ、罪と罰の原因とは無そのものであることが明らかになる。

しかし「原因を有していない」から「無を有している」との転換において無が肯定的に表示されているにしても、もちろん無が質料的原因として機能しているわけではない。ここで注目すべきことは、ここで語られている「無」が「無からの創造」(*creatio ex nihilo*)における「無」を同定していることである⁵⁾。しかしそうはいつでも、創造と悪との連関が明確になったわけではない。神の創造行為からいかにして悪が生成してくるのか、この問いを考察することはエックハルトにおける創造解釈の特徴を明らかにし、同時に悪の理解をより鮮明にするだろうと思える。

以上の考察の導入部として『ヨハネ福音書註解』から以下の文を引用したい。

「すべての悪の原因は、もし悪が原因を持っているとするならば、事物がそれ自体において分割されることである。」⁶⁾

ここでは、悪の原因が無とはみなされず、分割 (*divisio*) であると理解されている。この分割とはエックハルトによれば、それ自体として悪であり、悪に由来するものであり、悪のうちにあるものである⁷⁾。つまり悪の原因が分割であるとされ、さらに分割そのものは悪であると理解されている。ここまでわれわ

れは悪の原因が無であると考えてきたが、ここに分割という概念が付加されることで、われわれの考究は今や少々複雑の傾向にある。しかも分割と無との関係を考察の対象にしなくてはならないが、こうなってくると議論は迷路に陥っていくように見える。しかしこうした事態の原因はエックハルトにおける創造理解がわれわれにとって依然としてあいまいのままであるからである。そこでわれわれは以下においてエックハルトにおける創造論の特徴を明らかにしてみたい。

2. 創造における受動性

エックハルトにおける創造論を考えると、われわれは2つのアスペクトを考慮する必要がある。つまり一つは能動者すなわち創造主としての神の側からのものであり、もう一つは受動者すなわち被造物の側からのものである。前者は「存在を運び集めること」(collatio esse)としての創造、後者は「一性から落下すること」(cadit ab unitate)として創造されることである。悪の原因が分割であるにあるとするエックハルトの解釈は、創造の受動的アスペクトとの連関の考察を通して、その内容と構造が明らかになる。そこでまず、このアスペクトに限定し以下において考察してみたい⁸⁾。

2.1. 一性からの落下

エックハルトは「創世記」第1章1節「初めに神は天と地を創造された」の註解において、「あるものが創造され創造されたということは、一性と単一性から落下するということである」⁹⁾と述べ、「神は一なる者である」(申命6・4、ガラ3・20)というアウクトリタスに基づき、一性あるいは一が神に固有なものであると解している。さらにエックハルトは、「初めに神は天と地を創造された」に表示されているように、「天と地」が創造における原一分割であり、一なる神が最初に創造したのが《二》(duo)すなわち「天と地」であること¹⁰⁾に注目している。一性から落下したすべてのものは直接的に二へと落下し、その二性(dualitas)あるいは二重性(binarius)を媒介して他の数へと落下していく¹¹⁾。要す

るに、二は第一の対であり、すべての分割と複数性と数の根源であり、それに
対し一は非対であり、非分割の根源であることを意味する。

創造における原一分割であることに基づいて被造物は、一性から不等性、多
様性、多性へと落下する。しかし一性からの落下はつねに存在からの落下でも
ある。『創世記註解』第90節には次のように述べられている。

「この二または二重性および分割は、つねに存在そのものからの落下であり
逸脱である。なぜなら分割されたものはもはや存在しないからである。」¹²⁾

分割されたものは不吉なものや欠如と同じく悪の領域に属する¹³⁾。あらゆる
分割は前に述べたように、それ自体として悪であり、悪に由来し、悪のうちに
ある。しかもそれはもはや存在するものではない¹⁴⁾。

しかしここで問題なのは、一性からの落下がなぜ存在からの落下であるのか、
ということである。さきほど一性あるいは一は神に固有なものであるというエッ
クハルトの解釈に言及したが、『命題集序文』においては一 (unum) のほかに、
存在者ないし存在 (ens, esse)、真 (verum) そして善 (bonum) が付加されてい
る¹⁵⁾。エックハルトによって神のみに固有であると規定された存在・一・真・
善はいわゆる「超範疇的概念」(transcendentia) として理解されているが、それら
をエックハルトはほとんどの個所で「これら4つ」(haec quattuor) と呼んでい
る¹⁶⁾。

これら4つの概念的意味を理解することは、エックハルトの思想全体を体系的
に解明するうえで必須のことであると考えられる。われわれの当面の問題、すな
わち創造と悪との連関を明瞭にするために、以下において超範疇的概念に対す
るエックハルトの理解について概略してみよう。

2.1.1. 神の固有性としての超範疇的概念

超範疇的概念とは、アリストテレスの『カテゴリー論』において定められた
10の述語的概念に収められない概念を意味する。キリスト教神学からアリスト

テレスの批判的受容に徹していた中世哲学を通じていえることは、超範疇的概念は置換性という性格を有しているものとして解されていたということである¹⁷⁾。したがってエックハルトがこれらの概念を神の固有性として考えているということはアリストテレス的展開を直接的に受容していることを必ずしも意味しているわけではない。エックハルトにおける受容の特色は、これらの概念の置換可能性の根拠を神の一なる本性に置いているということである。しかもこの解釈は、これらの概念でもって神の本性を説明可能にするといった単純なものではなく、神のうちにおけるペルソナの発出、そしてその発出を範型とする世界の創造がこれらの概念で語られるという特徴を持っている¹⁸⁾。

さて、これら4つの概念の構成要素と考えられている存在・一・真・善について概説してみよう。

まず存在に関しては、生むものでもなくまた生まれたものでもないと捉えられ、したがって存在には始原 (principium) はない。つぎに一であるが、一も始原なしにあると解される。しかし一はもともと直接に存在に関わり、最初にかつ最小限度において存在を規定する。存在は本来において無限定であり、すなわち言語化不可能であり、したがって存在はいかなる次元においても顕現することはない。そうした存在は一によって最小限度に規定されることによって、神に「生む者」という性格が付与されることになる。一の存在への関わり方は、一が始原なしにあるという表現からも理解できるように、存在を始原として持つということではない。すなわち、一は存在を他者としているわけではない。その意味において、存在は一であり、そして一は被造物・非被造物にかかわらず、すべてのものを根源的に発出する力として顕現する¹⁹⁾。

真は一から生まれたものであり、その意味で他者すなわち一を始原として有している。善は一と真の両者から発出する。したがって善は始原を有しており、その意味で善は他者に由来している。これら4つの超範疇的概念がもつこうした構造はじつは神的ペルソナ間の区別を形成している。すなわち一は被造的であれ、非被造的であれ、すべてのものの第一の始原として、すべての神性と被造物の父と理解される。その一のみから真が生まれるのであるから、真は子を

意味する。さらに父である一と一のみから生まれる真から生まれるのが善であり、父と子は本性において一なのであるから、善には両者を結合するものとして聖霊が帰せられる。したがって、父からのみ子が生まれ、父と子から聖霊が生まれるという神的ペルソナ間の関係は、一・真・善の間の関係に相応する。

以上述べてきたことを図式化したいと思う。

存在：本来において無限定、生むものでも生まれるものでもない、始原なし

一：生む者、始原なし、父

真：生まれたもの、一を始原とする、子

善：発出したもの、一と真を始原としてもつ、聖霊

さらにエックハルトは、一性 (unitas)・同一性 (aequalitas)・不等性 (inaequalitas) における概念関係を以て、神的ペルソナの発出のプロセスと創造のプロセスにおける論理構造を明らかにする。一性と同一性との関係は同名同義的であり、つまり両者は本性において一なるものとして捉えられている。しかし両者の差異に関しては、一性が同一性を生むという発出関係において、すなわち「生むもの」と「生まれたもの」として捉えられる。すなわち一性は父に帰属し、同一性は子に帰属する。一性はまた、それが神的なものにせよ被造的なものにせよ、すべてのものの始原として解される。不等性とは、天と地という根源的二によって生じた被造物の多様性を意味する。不等性はしかしながら、同一性を媒介することによってのみ一性から発出してくる。というのは、不等性と一性および同一性との間にはアナログアの関係がはたらいているからである。

一性から同一性が発出し、同一性を媒介にして不等性が発出してくるというプロセスは、言うまでもなく創造のプロセスである。この場合、同一性は「言葉」(verbum) すなわち被造物の理念 (ratio) として理解される。さらに、不等性がその始原である一性に還帰していくという新プラトン主義のプロセスをヒントにして、同一性は子として捉えられる。この場合の子とは、エックハルト神学に即して厳密に言えば、魂の根底において生まれた神の子を指している。以上の

ことを図式化してみる。

一性：父

同一性：子

不等性：被造物

以上、われわれは神の固有性である存在・一・真・善という超範疇的概念が神の本性におけるペルソナの発出と世界の創造の構造とプロセスに適合されていることを見てきたが、この考察を踏まえて、ふたたび一性からの落下としての創造の議論に戻りたいと思う。ここで問題としたいテーマは、「被造物は純粋な無である」というエックハルト独自の辛辣な命題である。

2.1.2. 命題「被造物は純粋な無である」の意味

この命題はラテン語・ドイツ語を問わずエックハルトの著作に散見されるが、とくに有名なのはドイツ語説教第4にある以下の記述である。

「すべての被造物は一つの純粋なる無である。私は、被造物が小さいとか、何かあるものであると言っているのではなく、被造物とは一つの純粋なる無 (ein lûter niht) であると言う。」²⁰⁾

この命題が知られるようになったのは、エックハルトの死の翌年1329年に教皇ヨハネス22世によって出された勅書『主の耕地にて』(In argo dominico)のなかで異端として断罪されたからである²¹⁾。

ところでエックハルトに対して異端の嫌疑が与えられたのは、彼の死の3年前すなわち1325年である。翌年の1326年までにエックハルトのラテン語とドイツ語著作のなかから、第1回目として49命題、第2回目として59命題からなるリストが提出された。それに対してエックハルトは一つ一つの命題に対しそれぞれ解答を与えているが、その資料が今日では「弁明書」(Rechtfertigungsschrift)

と呼ばれている。

さて、本命題に与えられた嫌疑に対して、エックハルトは「弁明書」のなかで次のように解答している。

「これは真であると言うべきである。うえに解釈したように、次の言葉によっている。『すてのものはそれ（言葉）によって造られた。それなくしては無が造られた。』」²²⁾

命題「被造物は純粋な無である」が真であるとすれば、それは被造物がまったく存在していないことを意味しているのか、という問いは当然提出されてくるであろう。しかしこの問いはわれわれには説得力はない。われわれの周辺にはさまざまな事物が存在しているし、しかもわれわれ自身も存在している。それらすべての存在者の存在の原因が神の創造行為による結果であって脆弱なる存在性しか有していないとしても、まったく存在していないわけではない。それでは、エックハルトはいかなる観点から本命題が真であると断定したのか。以下において、この問いを考えてみたい。

この問いを考えるうえで考慮すべきことは、先に述べたように、存在・一・真・善が神にのみ固有であるというエックハルトの解釈である。つまり、これらの概念を述語とすると、主語となるのは本来において神だけであることを意味する。すなわち「神は存在する」、「神は一である」、「神は真である」、「神は善である」、これらの概念が本来的に述語となるのは、これら4つの命題のみであるということである。

それでは被造物を主語とする場合、これらの概念を述語として使用することは本来的ではないということになる。たとえば、以下のような2つの命題が形成されたとする：

命題A：「神は存在する」

命題B：「人間は存在する」

これら2つの命題における共通の述語「存在する」の本来の使用は命題Aのみである。それでは命題Bの述語「存在する」は本来の使用ではないことになるが、命題Aとの関係はどのようなものなのか。エックハルトはその関係をアナロギアと答える。エックハルトの著作全体を見通していえることは、アリストテレス以来の論理学的概念である同名異義 (aequivocatio)、同名同義 (univocatio) そしてアナロギア (analogia) をエックハルト独自の仕方では区別していることである。すなわち同名異義的なものは異なった事物によって区別され、同名同義的なものは同一の事物に属する区別によって区別され、アナロギア的なものは、実体である形相によって事物の本性のうちで、かつ存在のうちで成立している、数において一つの同一の事物のさまざまな様態によって (per modos) のみ区別される²³⁾。アナロギア的關係にある両項が原因と結果として了解されている場合、「様態によって」区別されるということは、結果が有しているものは全面的に原因に帰せられるという意味合いが含まれている。たとえば命題Aと命題Bとにおいて、命題Bにおける「存在する」は全面的に神の固有性である「存在」へと関係づけられていなければならない。

エックハルトは自らのアナロギア論を展開するうえで、旧約統編「集会の書」(Ecclesiasticus) 第24章29節すなわち「われを食む者はさらに飢える」(qui edunt me, adhuc esuriunt) を常用する。この聖句に神に対するすべての事物のアナロギア的關係のすべてが非常によく表現されているとエックハルトはみる。すなわちすべての被造物は存在しているがゆえに食み、他者によって存在しているがゆえにつねに飢えているのである。すべてのものは言葉によって造られ、言葉なしには無である。すべての被造物は神の創造的な威力に基づいており、つねにそして間断なく神から「食んでいる」。被造物には自らの存在の根拠を自己自身において有しているわけではない。したがって、被造物は自ら存在しているのではなく、また自己自身を満たすこともできない。すべてのこの世の存在者は存在の創造的根拠から食んでいなければ、自己の存在を保持することはできない。すなわち創造的根拠から食むことは満腹になるということであるが、しかし食

むことは同時に空腹であることを前提とする。

以上の考察から命題「被造物は純粋な無である」の意味が理解されうる。すなわち、《純粋な無》であるということは、この世界の存在者がいわば即物的に存在していないということではなく、自らの存在根拠を自らが持っていないこと、そして創造根拠である神から一瞬でも離反することはたちまち存在を喪失してしまうことを意味している²⁴⁾。つまり、被造物はつねに無へと差し向けられている。エックハルトの独特の表現を借りるならば、「すべての被造的なものは無の影 (umbra nihili) の味がする。」²⁵⁾ そして無は悪の領域である。被造物はつねに悪を生じさせる次元に落ち込む危険性を自らの存在様態において持っている。命題「被造物は純粋な無である」は悪が生じることのいわば形而上学的根拠を表示している。

ところで『ヨハネ福音書』第1章11節すなわち「言は、自分の民のところへ来た」を註解して次のように述べている。

「すべての存在し、一であり、真であり、善であるものは、それが存在し、一であり、真であり、善であることを、それ自身から有しているのではない。」²⁶⁾

本来の意味において神のみに帰属する存在・一・真・善を、この世に存在するすべてのものは永遠なるロゴス (言葉) から受け取ったのであって、したがって存在・一・真・善はつねにこのロゴスにおいてのみ理解されうるのである。

しかし創造が一性からの落下であるかぎり、われわれは多性・差異性そして不等性の渦巻く被造的世界のなかにいる。この世界にある制限されいわば狭小的なものはわれわれの認識を欺き裏切り、その多様性と雑多性のなかでわれわれの認識を一・真・善から逸らしてしまう。自らの存在根拠の喪失があらゆる悪を生じさせる。しかしわれわれが存在のすべての完全性を受け取ることができるのは神からのみであって、けっして自己自身からではない。したがって、人間が自らの固有な存在を自己自身から所有しているという妄想は高慢である。

エックハルトは悪をどのように考えたか

この妄想は神からの落下そして固有の存在の喪失を意味する空虚なる自己愛にほかならない。エックハルトは端的に次のように述べる。

「すべての悪の根源は自己愛である。」²⁷⁾

自己自身を愛する者は、神も隣人も愛することはできない。エックハルトによれば、彼が愛しているものは、不等性、不和そして分離である。

以上の考察から明らかなように、つねに無へと差し向けられ、悪をなす危険性を有しているのは自らの存在根拠の喪失という否定的契機として語られるが、しかしその反面すなわち神の愛という観点から見れば、存在根拠の喪失は神の恩寵として存在を受け取る無限なる受動性という本性として積極的に理解される。しかし依然として、われわれが悪からいかにして解放されるのか、この問いに対する答えは見出されていない。この問いに答えるためにエックハルトは神の存在の内部構造へと踏み込んでいく。最後にこの問いを考えてみたい。

3. 神名「存在するところの者」の聖化

エックハルトは『マタイによる福音書』第6章9節すなわち「あなたの名が聖とされんことを」の義解において、次のように語っている。

「ところで父はわれわれを自らの子として生むことによって聖化される。あらゆる罪と悪、すなわちつねに何らかの存在の欠如であることからわれわれを解放することによって、神の名すなわち「あるところの者」は聖化される。」²⁸⁾

エックハルトは受肉に関して「恩寵のための恩寵」(gratia pro gratia)と呼ぶが、それは受肉が「父がわれわれを自らの子として生む」ための恩寵であることを意味する。さらにエックハルトは、『ヨハネ福音書註解』第185節において、『ガラテアの信徒への手紙』第4章から「神は女から生じた自らの子を遣わした」、

「われわれが神の子らとして受け入れられるためであった」という聖句を引用し、受肉そのものが神のペルソナの発出と被造物の産出の中間的なもの（*media inter divinarum personarum processionem et creaturarum productionem*）であるとし、それらの両者の本性を帯びていることを明らかにする²⁹⁾。このことによって、エックハルトは、受肉について「永遠なる流出の模造」（*exemplata ab aeterna emanatione*）、「下級なる自然全体の範型」（*exemplar totius naturae inferioris*）と性格づけることに基づいて³⁰⁾、受肉における形而上学的解釈を試みている。

受肉とは本来において永遠なるロゴスが人間本性を受け取ることを意味しているが、エックハルトはその人間本性に関して、「キリストと同名同義的に等しく、共通なもの」（*aequaliter communis cum Christo univoce*）³¹⁾と解している。人間本性がキリストと同名同義的に等しく共通であるということは、人間本性が非被造的なものの性格を帯びていることを意味する。したがって人間本性は被造的な存在として人間における固有性を表示する肉に対して超越的關係にあると理解される。人間本性におけるこの超越性が、エックハルトがいわゆる《魂における神の子の誕生》（*partus dei in anima*; Gottes Geburt in der Seele）として実存的に解釈する根拠なのである。すなわち人間本性は、神が自らの独子を遣わし、そこで自己自身を生む、いかなる被造物も近づくことができない純粹なる魂（*anima munda*）として把握される。

人間本性におけるこの純粹性は、神の子を受容する能力の本質であって、その受容能力はその純粹性を根拠としてその全存在を受容する対象すなわち神から受け取る。したがって人間本性は、先ほど述べたように、存在のうちにまた被造的な存在者としての人間の現実化以前に被造的な存在者としての人間存在を証明するための条件として、この世における人間の主体的可能態であり、創造が現実化する以前から創造されるべきものに帰属している、恩寵を享受するための本性なのである。

さて、魂に神的存在が与えられ魂が豊かになるということは、恩寵によって人間が被造物としての自分自身より高いあるものになるということである。そのことを『コリントの信徒への手紙1』第15章10節「神の恩寵によって、私は

私がそれであるところのものである」(gratia dei sum id quod sum) とのパウロの言葉が表明している。使徒が自らの信仰確信を表明した言葉にエックハルトは、神の創造の業における形相・作出者・目的を読み取る。「恩寵によって」(gratia) すなわち形相にしたがってあらゆる事物にその価値と美とがもたらされ、「神の」(dei) すなわち恩寵の作出因である神の高貴性が示され、「私は私がそれであるところのものである」(sum id quod sum) すなわち神のうちにおける神的存在が神から授与されるという創造の目的が示される³²⁾。

さらにエックハルトはこのパウロの言葉をテーマとしたラテン語説教の冒頭において、「すべてのものは『何であるか』(quod quid est) に応じて、自らの『それによってあるところのもの』(quo est) ほめ、賛美する」³³⁾と語り、哲学的概念である《quo est》を「ローマの信徒への手紙」第11章36節「神から、神によって、神に向かって」との聖句と関連させながら、そこに父・子・聖霊の神的ペルソナにおける作出・形相・目的という観点からの業を読み取り、この哲学的概念が神の恩寵に根源的に由来しているものであると理解する。

エックハルトは、以上のように、創造の目的を表示する「私は私がそれであるところのものである」に恩寵の豊饒性とすぐれた結実が存することを理解する。そして被造物において神がなす業はすべて恩寵であり、恩寵はこの世界における唯一神の行為であり、神からの賜りものなのであるから、人間は恩寵によって神と等しく形成されることになる。というのは、恩寵がそれ自体として付与するものが神的存在にほかならないからである³⁴⁾。したがって、「私は私がそれであるところのものである」(sum id quod sum) は『出エジプト記』第3章14節でいわれる「私は存在するところの者である」(ego sum qui sum) という神の存在性を表示する神自身の固有名に関連づけられることによって、その真の意味が開示されるのである。なぜなら前にも述べたように、神にとって存在は存在を授与するというはたらきそれ自体であるからである。

「私は存在するところの者である」は、エックハルトによれば、神において存在が自己自身へと向かい自己自身へと還帰するという、存在それ自体に固有な力動性を表示している。エックハルトは、『出エジプト記註解』(*Expositio libri*

Exodi 第16節において、この力動性を「ある種の沸騰ないしは自己自身の出産」(quaedam bullitio sive parturitio sui) と言い表し、さらに「存在とは自己自身のうちで沸騰し、自己自身のうちへそして自己自身へ向かって溢れ出る」³⁵⁾と述べている。子は神の最内奥である父の心胸から生まれ出る永遠なるロゴス(言葉、理念)であるが、外へ《噴出》(ebullitio)する前におけるすなわち被造物が産出される前における、自己自身において沸騰する生命であると理解される。したがって神のうちにおけるペルソナの発出は創造の原像ないしは範型として創造の根拠なのである。つまり神の存在は善であるかぎり、すなわち創造者であるかぎり、《噴出》の始原であり、父すなわち一であるかぎりにおいて、《噴出》の原像・原因としての《沸騰》(bullitio)の始原なのである。

創造は本来においてすべてのものを無から存在へと運び集めることであるが、それは無に差し向けられている被造物に存在を付与することで無からすなわち悪から解放することを意味する。その存在付与とは神が人間の魂のうちに自らの子を生むということに帰着するが、それは同時に「私がそれであるところのもの」を回復するという創造の目的を意味している。

悪の問題を創造との連関のもとで考察することは、超範疇的概念によって構成されている神の存在の力動性を明らかにすることでもある。さらには創造と神的ペルソナの発出との中間に位置する受肉の形而上学の形成を促すが、その形而上学は同時にわれわれを悪から解放する創造神学でもある。

悪の問題は、悪は存在の欠如として解されるかぎり、形而上学的領域に属するが、被造的存在の根拠が神の創造行為であるかぎり、悪は神の恩寵という観点から人間救済の契機となる。それは同時に人間の行為の倫理的規定の根拠とも解されることになる。というのも、すべての存在、人間における倫理的行為、知性的認識、これらの根拠が第一始原である神の存在だからである。

注

- 1) この論考に関してエックハルトはるる言及しているのでたしかに存在していたであろうが、現存していない。

エックハルトのテキストは以下のものを使用した。

Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff. (Deutsche Werke = DW; Lateinische Werke = LW).

- 2) Liber parabolarum Genesis (=In Gen. II), n. 9; LW I, 480, 3-4: Effectus enim sonat extra factus sive factum extra facientem.
- 3) Expositio sancti evangelii secundum Iohannem (=In Ioh.), n. 75; LW III, 63, 6-7: lux in tenebris lucet etc., quia malum semper est in boni, nec videtur nec cognoscitur nec lucet nisi in specie boni.
- 4) *Sermones*, n. 290; LW IV, 260, 4-5: quaerere causam nihil est nihil quaerere.
- 5) 「無から」(ex nihilo)と言われるとき、前置詞exの意味について確認しておかなければならないことがある。それはexが表示しているのは、たとえば「青銅から彫像が作られる」(statua fit ex aere)と言われる場合のように、質料因(causa materialis)ではないということである。もしexが質料因を表示していることになれば、無は存在者の質料にならないから、いかなる意味においても存在の原因ではありえない。ということは、「無からの創造」それ自体が不可能になってしまう。

トマスは以上の異論に対して『神学大全』第I部第45問題第1項第3異論解答において、exはただたんに順序あるいは秩序(ordō)を表示しているにすぎないと述べている。つまりexは、たとえば「朝から昼になる」(ex mane fit meridies)が「朝のあとに昼になる」(post mane fit meridies)を意味するように、「あとに」(post)という順序を表示しているにすぎないということである。しかしながらトマスは、「あるものが無から生ずる」と言われる場合、前置詞exが無という概念に含まれている否定を包み込んでいるのか、あるいは否定によって包み込まれているのか、ということを理解しなければならないとして、われわれの注意を喚起している。前者であれば、秩序は肯定され、存在するものの以前におけるその非存在への秩序が表示され、後者であれば、秩序の関係が否定されることになる。つまり、「無について語る」が「何も語っていない」を意味するように、「無から生ずる」は「いかなるものからも生じない」ということを表示するということである。これはexにおける質料因への関係を否定することになる。したがって、トマスはいずれの場合においても、「無からの創造」には有効であると述べている。以上の議論をエックハルトは踏まえたうえで自らの論を展開している。

- 6) In Ioh. n. 550, 480, 5-6: causa omnis mali, si tamen malum causam haberet, est quod res est in se divisa.
- 7) Expositio Libri Genesis (=In Gen. I), n. 88, LW I, 246, 7-8: Divisio autem omnis, in quantum huiusmodi, mala est, ex malo et in malo.
- 8) なお、創造における能動的アスペクトに関しては、以下の拙著を参照されたい。『哲学と神学のハルモニア——エックハルト神学が目指したもの——』、知泉書館、

2013年。

- 9) In Gen. I, n. 26; LW I, 205, 3-4: quod aliquid creatur et creatum est, cadit ab unitate et simplicitate.
- 10) このことについてエックハルトは『創世記比喩解』第18節において「一が二を造った」(id est unum duo) と簡潔に述べている。
- 11) In Gen. I, n.26 LW I, 205, 6-7: omne quod cadit ab uno, primo omnium, cadit in duo immediate; in alios autem numeros cadit mediante dualitate.
- 12) In Gen. I, n. 90; LW I, 248, 15-16: Binarius sive dualitas sicut divisio semper est casus et recessus ab ipso esse.
- 13) Serm. XXXIV, 2, n. 345, LW IV, 300, 7-9: Hinc iterum numerus par ratione binarii descendentis in se sive in ipsum in ordine mali cadit sicut sinistrum et privatio.
- 14) In Gen. I, n. 90; LW I, 248, 16: Quod enim dividitur iam non est.
- 15) Prologus in opus propositionum (=Prol. op. prop.), n. 4; LW I, 167, 9-10: solus deus proprie est ens, unum, verum et bonum.
- 16) しかし《transcendentia》という術語をエックハルトはたった1回だけ使用している。In Gen. I, n. 128; LW I, 283, 4-6: dicuntur sana secundum naturam analogiae, qua omnia huiusmodi transcendentia se habent ad creaturas, puta ens, unum, verum, bonum。
なお、《transcendentia》に関する概念史と関連文献に関しては、以下のものを参照されたい。
Aertsen, Jan A., The medieval Doctrine of the Transcendentals the current state of research, in: *Bulletin de philosophie médiévale*, 33. 1991, 130-147, (137f.: German Dominican School).
Hugolin von Orvietto, Sent. I, Prol. qu. 2, ed. W. Eckermann, 73-77.
- 17) このテーマには、中世におけるアリストテレス受容とプラトンとくにネオプラトニズム受要との複雑な連関がその背景にある。その連関をアルベルトゥス・マグヌスのその起源とするいわゆるドイツ・ドミニコ会に限定して言えば、1329年のエックハルト断罪後にプロクロス『神学綱要』の註解(Expositio super Elementationem theologicam procli)を完成させたモースブルクのベルトルト(Berthold von Moosburg, 1361年頃没)は「存在者」、「一」、「善」の置換性を認めていない。さらにプラトニズムにおける最高善を「存在者」を超える始原として位置づけ、「存在者」を最も普遍的な概念であるとするアリストテリズムを批判している。つまりベルトルトは『カテゴリー論』において述語の普遍性としての「善」の理解を誤謬であるとし、プラトニズム的伝統を復活させようとしている。
- 18) この解釈には、自らの思想全体に対するエックハルトの意図が反映している。その意図はたとえば『ヨハネ福音書註解』第2節に表示されている。「著者の意図は、彼のその他のすべての著作とおなじく、聖なるキリスト教信仰と両聖書の主張していることがらを、哲学者たちの自然的論証によって解釈することである。」(In Ioh. n.

2; LW III, 4, 4-6: *intentio est auctoris, sicut et in omnibus suis editionibus, ea quae sacra asserit fides christiana et utriusque testamenti scriptura, exponere per rationes naturales philosophorum.*)

フラッシュ (Flasch, K., 1930-) は、とくに「哲学者たちの自然的論証」(*rationes naturales philosophorum*) という表現に注目し、トマスが啓示によってのみ理解されるべきであるとした三位一体論や受肉論においてエックハルトはその哲学的解釈を試みようとしていることがエックハルト本来の意図であると主張している。さらにフラッシュによれば、「哲学者たちの自然的論証」によって明らかにされることはこれだけに とどまらない。たとえば受肉の神秘を信仰者だけを対象にした神学の領域に限定することなく、一般に開かれている哲学の領域に属するものとして再構成し、それを「哲学者たちの自然的論証による受肉の形而上学」(*eine Metaphysik der Inkarnation per rationes naturales philosophorum*) と呼んでいる (Flasch, K., *Die Intention Meister Eckharts*, in: *Sprache und Begriff. Festschr. B. Liebrucks*, Meisenheim am Glan 1974, 297.)

- 19) エックハルトにとって、存在と一との関係は非常に微妙である。この関係は新プラトン主義からのエックハルトへの影響がどのようなものであったのかという、哲学的にも興味深い問題である。これに関しては以下の拙著を参照されたい。
山崎達也、『哲学と神学のハルモニア——エックハルト神学が目指したもの——』(知泉書館、2013年)、とくに第5章「神の存在と創造」。
- 20) Pr. 4; DW I, 69, 7-70, 1: *Alle créatûren sint ein lûter niht. Ich spriche niht, daz sie kleine sîn oder iht sîn: sie sint ein lûter niht.*
- 21) Denzinger, H., *Enchiridion symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum*, 38., aktualisierte Auflage, 1999, Freiburg im Breisgau, Basel, Rom, Wien, n. 976, S.403: *Omnes creaturae sunt unum purum nihil: non dico, quod sint modicum vel aliquid, sed quod sint unum purum nihil.*
- 22) *Processus Coloniensis Pars altera (=Proc. Col. II)*, n. 80; LW V, 338, 16-17: *Dicendum quod hoc verum est, ut supra expositum est, secundum illud: „omnia per ipsum facta sunt, et sine ipso factum est nihil“.*

なお、別の個所では次のように弁明されている。「このことを否定することは神を冒瀆することであり、神を否定することである。というのは、もし被造物が、いかに短い時間であったとしても、何らかの存在を神なしに持っているのであれば、神はすべてのものの原因ではないであろう。また、被造物は造られたものではなく、なってしまおうであろう。というのは、創造とは無から存在を受け取ることだからである。さらに、二は分割を意味する。すなわち二はすべての分割の根源である。したがって、神が分割されたものであり、何らかの他なるものとともに二であれば、それは存在ではないであろう。というのは、神とは存在であり、すべての存在の直接の原因だからである。」(Proc. Col. II, n. 107; LW V, 344, 5-10: *Dicendum quod hoc*

negare est deum blasphemare et ipsum abnegare. Si enim creatura habet aliquod esse quantumcumque modicum sine deo, tunc deus non est causa omnium. Praeterea, creatura non esset creata. Creatio enim est acceptio esse ex nihilo. Rursus, duo divisionem dicit et radix est omnis divisionis. Unde si deus divisus et duo cum alio quocumque, illud non erit ens. Deus enim est esse et immediata causa omnis esse.)

- 23) Expositio libri Exodi (=In Exod.), n. 54, LW II, 60, 1-5: Sciendum ergo quod haec est differentia aequivoci, univoci et analogi, quod aequivocum distingui per res diversas, univocum per rei eisdem differentias, analogum autem nec sic nec sic, sed solum per modos unius eiusdem rei numero constitutae iam in rerum natura et in esse per formam, quae est substantia.
- 24) Pr. 4; DWI, 70, 3-4: Kërte sich got ab allen crêatûren einen ougenblik, sô wûrden sie ze nihte.
- 25) In Ioh. n. 20; LW III, 17, 10-11: Res enim omnis creata sapit umburam nihili.
- 26) In Ioh. n. 99; LW III, 85, 2-4: quod nec entia nec quae unum sunt aut vera et bona, non habent ex se nec quod sunt nec quod unum sunt nec vera et bona.
- 27) In Ioh. n. 544, LW III, 475, 1-2: radix omnis mali est amor sui.
- 28) In Ioh. n. 603; LW III, 526, 7-9: Sanctificatur autem pater generando nos sibi filios; sanctificatur nomen suum "qui est" liberando nos ab omni peccato et malo, quod semper est privaio alicuius esse.
- 29) Vgl. In Ioh. n. 185; LW III, 154, 11-13: dei sapientia sic caro fieri dignata est, ut ipsa incarnatio quasi media inter divinarum personarum processionem et creaturarum productionem utriusque naturam sapit.
- 30) Vgl. In Ioh. n. 185; LW III, 154, 13-14: incarnatio ipsa sit exemplata quidem ab aeterna emanatione et exemplar totius naturae inferioris.
- 31) In Ioh. n. 289; LW III, 241, 7-8: Primo quidem quod natura est nobis omnibus aequaliter communis cum Christo univoce.
- 32) Vgl. Serm. XXV, 1, n. 254; LW IV, 232, 8-10: Ex forma est rei cuiuslibet pretiositas et speciositas, ex efficiente generositas, ex fine fructuositas.
- 33) Serm. XXV, 1, n. 251; LW IV, 230, 1: Omne quod quid est id quod est laudat et praedicat suum quo est.
- 34) In Ioh. n. 521; LW III, 450, 3: Gratia igitur per se dat esse divinum.
- 35) In Exod. n. 16; LW II, 21, 11-12: in se fervens et in se ipso et in se ipsum liquescens et bulliens.